



西川扇重郎
Nishikawa Senshigero

経歴

十世宗家西川扇藏に師事。

協会、国立劇場主催公演、文化庁学校巡回公演や海外公演に出演。

日本舞踊普及のため各地でのワークショップにも積極的に参加。自身の会「扇重郎会」主宰。

主な受賞に新春会長賞、舞踊批評家協会賞新人賞。

日本舞踊教室のご案内

まずは日本舞踊はどんなものなのか、どういう練習をしているのか、それを知って頂くことがはじめての一步と考えています。

見学会は土日祝日を中心に不定期に実施しています。まずは見学希望のご連絡をお待ちしています。興味をもって頂けたらぜひ無料体験もしていただければと思います。自分が楽しく踊れる場所であるかを、ご自身の目で確認をしてみてくださいればと思います。



公式ホームページ

アクセス

西川扇重郎日本舞踊研究所
〒170-0001 東京都豊島区西巢鴨4丁目6-1 レゾン802
師範：西川 扇重郎
shigeder.160@i.softbank.jp
090-8476-4319

西川扇重郎日本舞踊稽古場
〒935-0015 富山県水見市伊勢大町1丁目2-33
師範：西川 扇重郎・西川 扇知博
shigeder.160@i.softbank.jp
090-8476-4319

扇重郎会踊り初め

日時.. 令和八年三月二十一日
場所.. 南大塚ホール
開場.. 十一時三十分
開演.. 十二時

一、清元 扇 西川扇博由

春の花や胡蝶を謳い、螢に月、そして十五夜、それに松扇の雅な風情に聞（寢室）に積もる雪から重ね扇と綴る本作は、まるで絵巻のように扇が詠まれ、季節はめぐり桜扇に夢を見るが如く御所の一年が謳われています。西川流の流舞です。

二、長唄 手習子 伊藤佐幸子

この曲は、ある春の日、寺子屋帰りの娘さんが、日傘や手習草紙（文字の練習帳）を手に、道草をする様子を描いた曲です。蝶を追うあとけなさや、ちょっとませた娘の恋心などが歌われます。「蝶々」「日傘」「手習い草紙」など、小道具がたくさん出てくるのもこの曲の楽しみです。

三、長唄 雨の五郎 深井実和子

曾我兄弟の弟である五郎（兄は十郎祐成（すけなり））が、鎌倉の遊女で恋人である、化粧坂（けわいざか）の少将の元へ、雨の中駆けつける様子が、仇討ちへの勇ましい心と交互に唄われています。

四、長唄 松の緑 伊藤由都子

「長唄は『松の緑』に始まり『松の緑』に終わる」と言われるほどの名曲です。いまは幼い禿が、やがて立派な松の位の太夫となり、根引（身請けされること）され年老いるまで幸せに暮らすように、明るい未来の、今日がその始まりだよ、と、前途を祝う内容です。

五、新曲 桜道成寺 内山邦子

おなじみの京鹿子娘道成寺をモチーフに、その歌詞の一部を織り交ぜながら、桜咲く情景を背景に恋心・嫉妬・恨みなど女心の多面性を映し出します。

六、長唄 鳥の千歳 中井克典

「鳥の千歳」は、最初の白拍子（平安時代に生まれた、舞を舞う職業）と言われている女性です。鶴亀が遊び、朝日が昇る和田津海に浮かぶ蓬莱島で、千歳がめでたい今様を歌っている、という構成になっています。

七、常磐津 山姥 伊藤慶和

四季折々の花や風景と絡めながら、かつて自分がそうであったように遊女の心持ちをうたっています。一年の月日が立つ早さと、遊女をやめ今は山姥として過ごすこの身とを掛けて老い行く心のあわただしさや寂しい心持ちを述べます。最後に、自身は山へ帰り、のちの金太郎となる怪童丸を見送る今生の別れの場面で終わります。

八、長唄 晒女 小池兼友

別名「近江のお兼」という名でも知られていて、近江八景になぞらえた八変化の一つ。多くの力持ちの男たちが手を焼く暴れ馬を、琵琶湖に洗い物に来た娘「お兼」が、下駄で手綱を踏んで簡単に取り押さえるという、怪力を持つ女性が主人公です。この度は若い者二人と立ち廻り、終盤は晒を振りながらリズムカルに踊ります。

九、清元 扇 森通葉

前出の解説をご参照ください。

十、清元 花がたみ 西川扇重都

花札に描かれる草花や「役」を歌詞全体に取り入れて一年の四季を表現したユニークな内容です。雅楽を意識した前弾きや、節が極めて趣があり乙にできております。当流は、元禄風に毛槍を使い踊ります。

十一、長唄 猿舞 西川扇重桜

本名題「三升猿曲舞（しかくばしらさるのくせまい）」は文政二年十一月十八日江戸・河原崎座で初演された「奴江戸花鎗（やつこえどのはなやり）」という興行の一部で、（一番目）六立て目の演目です。好評を受けてその後、独立した踊り・長唄「猿舞」になるのです。猿は狂言上の主役、羽柴秀吉のこと。

十二、清元 卯の花 西川扇次翔

植物の「卯の花」のことで、江戸は深川、向島界隈の四季の風物を詠み込んだ歌詞になっています。卯の花を雪に見立てて兔を作る、という可愛らしい洒落から始まり、江戸っ子の憧れ「初鰹」。夏は屋根船（小型の船）に乗って天保に流行った「佃節」を口ずさみます。

十三、義太夫・長唄 京鹿子娘道成寺 西川扇次珠

舞台は紀州、道成寺の鐘供養の日。遠き昔に起きた安珍と清姫の悲恋の物語を連想させながら満開の山桜と釣鐘の花やかな風情の中、平安の世より伝わる白拍子の舞が始まります。切ない恋心や執念、そして怨霊へと変化していく心情がうまく描かれています。※抜粋して上演

十四、大和楽 あやめ 西川扇京梅

大和楽の作品中最もポピュラーな「あやめ」ですが演出は好みに応じて振付が行われており定式がありません。当流は、あやめ、池、青柳、空に流れる雲といった絵画的な情景と、五月雨に濡れるあやめをモチーフに若き女性の濃紫の哀愁をなやましく描いた作品です。

十五、常磐津 粟餅 西川扇重郎

西川扇知博

粟餅売りは曲づきをしながら町々を売り歩いた夫婦。餅つきのくだりから、餅づくし、吉原情緒、そして六歌仙の趣向になり、団扇太鼓で派手に終わる風俗舞踊の妙味な作品。



【出典】
俺の日本舞踊

西川会
清元國恵太夫 OFFICIAL WEBSITE
立命館大学アトリトリサーチセンター